

COP25 とサステナブルなエネルギー

中山 寿美枝 (なかやま すみえ) 電源開発株式会社 経営企画部 審議役

これまで4回にわたって、サステナブルなエネルギーの方向性を考察するべく、低炭素化と電化の関係、2℃シナリオの裏表、SDGs とパリ協定、気候変動対策の体系と気候変動、などについて分析を交えて解説を行ってきた。そろそろ、課題が明らかになり、その対処方法とエネルギーの目指すべき方向が見えてきたかということ、どうだろうか。むしろ、現実と理想の間のギャップの大きさが明確になってきたのではないだろうか。最終回では、改めて現在地を確認した上で問題の本質を考えてみたい。

はじめに

昨年12月にマドリードで開催されたCOP25に参加してきた。今回は何とんでも、グreta・トゥーンベリが各種サイドイベントそしてCOPプレナリー会場で講演を行い、会場のCOP参加者のみならず世界のメディアの注目を集めていたことが象徴的だった。会場ではあたかも1.5℃がパリ協定で合意された目標であるかのような発言が、グテーレス国連事務総長を含めて多くの人から聞かれた。実際には、パリ協定で定められた長期目標は温度上昇を「2℃を十分下回るレベルに抑制する」ことであり、「1.5℃に抑える努力を追求する」のは努力目標であるというのに。

これまでの連載で示してきたように、現実のエネルギー動向とパリ協定の長期目標である2℃抑制の間には大きなギャップがある。2℃シナリオ実現には世界共通のカーボン価格が必要であり、途上国の負担がより重いこと、SDGs全体をバランスよく達成すべきであるところ2℃シナリオ優先の考え方があること、緩和のみを重視して(適応や)気候工学を研究することすら批判的なグループがあること、など各種の問題や矛盾があることを示してきたが、それらの解決方法に

ついては、まだ誰も答えを出せていない。最終回では、それにも関わらず、1.5℃抑制を目指そうというのは、更にギャップを拡大することになる、ということを実体的に示した上で、改めて目指すべきサステナブルなエネルギーの方向性について考えてみたい。

1. 現実と2℃目標のギャップ

IEAからWorld Energy Outlook 2019 (WEO2019)が2019年11月に発刊された。図1はその日本でのお披露目イベントで示された象徴的な図であり、「サステナブルなエネルギーの目標達成のためには、1つの解決策または単純な解決策などない」という説明と共に示されたものである。

この図から、二つのことが読み取れる。一つは、NDC整合シナリオのCO₂排出曲線と2℃シナリオのCO₂排出曲線は年々ギャップが拡大していくということ。2050年時点では前者(約36Gt)、と後者(約10Gt)のギャップは26Gtに達する。そしてもう一つは、2050年には26Gt(削減率で72%)に達する削減のために、省エネ、再エネ、燃料転換・CCUS・その

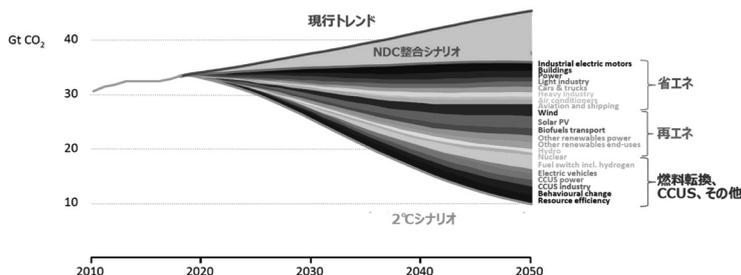


図1 2℃シナリオ実現のための技術別の削減

出典：貞森 恵祐、IEEJ 国際エネルギーシンポジウム講演資料